

関係重工業会社に入社し、役員まで務めて退いた。これまでにお世話になった人は数知れない。特に敗戦直後は思わぬ巡り合わせで、思わぬ人々にお世話になった。これだけは忘れてはならないと思っている。

## ハルビンの鐘

富山県 村澤隆 司

### 一、私のおいたち

私は大正十四（一九二五）年九月、富山県の片田舎で父金造、母やよいの次男として生まれた。家は農家であったが、父は農業の傍ら当時の北陸タイムス社に勤めていて、朝早く畑仕事をしてから新聞社に出掛けしていた。その後、父が帰ってくるまで母が一人で農作業をするという毎日であった。私は子供のころは、村の神社とかお寺とかでよく遊んでいた。遊び仲間の上田君が餓鬼大将でその次が私だったが二人は仲良かった。

昭和十二（一九三七）年七月、支那事変がぼつ発して、村からも召集で戦地に行く人が多くなってきた。私たちが日の丸小旗を打ち振って見送ったものだった。それから世間はだんだんと軍国調になってきて、昭和十三年四月には国家総動員法が施行され、生活必需品の統制によって配給制度が始まった。当時、村にはまだ文盲の人がいて、父はよく戦地への便りの代筆や、戦地から来た手紙を読んであげたりして随分と喜ばれていた。

私が高等科一年生の時に、友人の上口君から相談があると言われて、何事かと思いい話を聞いたところ、「僕は、満蒙開拓義勇軍に応募して満州開拓に行く。君はどうか」ということだった。三年間の現地訓練が終わると、土地が与えられて独立して大きな農場経営者になれるし、国がこれを助成しているという事も話してくれた。彼も農家の三男坊であった。私はその話を聞いて、「自分も近い将来には義勇軍に入ろう。そして大地主になって何頭もの牛や馬で耕作して、穀物や野菜をたくさん作ろう」と決心した。農家の次男で

あったので、条件は揃っていた。

だがその後、義勇軍に行きたいという気持ちは変わらなかったが、家の建て直しがあり、学校から帰るとすぐに手伝わされて忙しく過ごしていたので、両親に私の決心を伝える機会がなかった。

昭和十四年の冬に、立野が原という所で、満州開拓に志を持っている者が集まる集会があったのでそれに参加することとして、両親に私の決心を話した。父は黙ったままうなずいてくれたが、母は「まだこんなに小さいのにそんな遠い所に行くなんて！」と言って声を詰まらせながら台所に入り込んでしまった。立野が原に行き、集まった者といろいろ話し合い、私は改めて決心を固めた。その後を実施された採用試験にも幸いに合格して、昭和十五年三月出立の日を迎えた。

## 二、内原訓練所での生活

出征兵士を見送るのと同じ様に出陣式があった。朝食は、いつもは口にするともできない鯛の尾頭付きと赤飯で、その後、親戚や友人、近所の人たちの見送りを受けて家を出て、村の神社で村長や村会議員など

の名士から激励の言葉を受け、日の丸の小旗で埋めつくされた村道を軍歌で送られ駅に向かった。当時十五歳だった私は身体も小さかったので、見送ってくれた人の中には私の存在が分からなかったようだし、分かった人でも「あんなに小さい子供を、よくも満州なんて遠い所にやれるね」と言っていた人もいたそう

だ。  
富山県から一緒に行く者は二百人で、富山県庁で全員集まり、そこで壮行会があって、知事などの激励を受けた。忘れもしない昭和十五年三月二十八日に、念願の茨城県内原村の満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所に入所した。

丸大造りの正門があり、その板囲いの哨所に武装した先輩義勇軍の歩哨が立っており、門内では整列した先輩達が出迎えてくれた。松林を切り開いた所に日輪兵舎が三百棟ほど並んでいたが、これは「ひまわり兵舎」と呼ばれていた。蒙古の「包（バオ）」を模倣したものだそうだ。訓練所では六十人が一箇小隊として編成されて、ひまわり兵舎一棟に入った。

翌日、群馬県からの入所者が到着し、混成一箇隊三百人が揃った。わずか十五、六歳の者が、親兄弟と別れて身も知らぬ人たちの中に入り、これから寝食を共にすることになったのだが、やはりまだ子供のことで、夜になると、父母や家のことを思い出して泣いている姿が多く見られた。私もそれを見て寂しくなり、涙が出てきた。

一カ月ほど経った頃、父が面会に来てくれたが、一年も会っていないくらいに懐かしく嬉しかった。父は私の大好物である大福餅を持って来たが、私は父の顔を見ただけで胸がいっぱいになって、大福餅が口に入らなかったことを覚えていた。面会時間は一時間だったが、あつという間に過ぎてしまった。父は中隊長にも面会して、私のことをくれぐれもよろしく願いますと頼んで帰ったそうである。さらに三カ月経った頃に、兄があんころ餅をどっさり持って面会に来てくれた。

訓練所での生活は、起床ラップと農民道場で叩く太鼓の音で一日が始まった。一口で言えば、軍隊生活と

農民生活を一つにまとめた団体生活であった。午前五時半の起床から午後九時の消灯まで、すべて時間によって行動するので、慣れるまでは大変な苦痛であった。内原生活での一番苦しかった思い出は、朝食前に二、三里走ることであった。雨の日を除いて毎日続くので、足にまめができてそのうちに破れてしまい、痛くて痛くて走れなくなったが、それでも走らなければならず、歯を食いしばって、歩くように走ったものだった。また、整理当番というのがあって、これがまた大変にきつい作業で、四斗樽に入った残飯を豚舎まで二人で担いでいくのだが、十五、六歳の体力ではとても重荷で苦しかった。

反対に楽しかった事は、慰問団が来て演芸会があった事や、気の合った友達と内原の町に出掛けた事や、我が家や友達から便りが来た時だった。特に学校時代の友達からの便りは、いろいろな楽しかった事を思い出して嬉しかった。

訓練所では、満蒙開拓者の養成を目的とした教育訓練が五カ月間に渡って行われた。特色のあるものの一

つに日本体操があつた。舟を漕ぐように体を動かし、鋤でも打ち振るような型をするものもあつたが、一種の「行」である。また、統一された精神教育にも独自性があつて、一つのことを繰り返し繰り返し行つて徹底させるというやり方で、これは加藤完治所長の発想であつた。加藤所長の精神教育は熱弁で、聴く者は、話に吸い込まれるような感じであつた。

内原、対店、軍隊、抑留、そして帰国と、青春多感な嵐のような十年間であつたが、内原での生活は、それから後の私の人格を養成してくれた忘れられない場所であつた。

### 三、渡満の日近づく

昭和十五年八月の終わり、内原での所定の訓練期間の五カ月が夢のように過ぎて、待ち望んだ渡満の準備が開始された。まず最初に各種の予防注射が始まつたが、今まで知らなかつた注射ばかりだつた。訓練も、現地の治安状況に対応する内容となり、匪賊との戦闘訓練も本格的でいよいよ仕上げの段階となつた。制服、制帽、靴などの装具もすべて新品が支給され、制

帽には桜の記章が光っていて身の引き締まる思いだつた。下着はパンツではなく越中褌で、慣れないので時々ずり落ちて足首のところまで下がってくるので、お互いにその姿を見て大笑いしたこともあつた。

いよいよ退所の式典を迎えた。加藤所長から「心を合わせてことを成し、義勇軍としての使命を深く自覚して行動すること。食べ物には十分注意して健康管理に努めること」などの訓示があり、その後、二百八十二人が分列行進をした。新しく支給された国防色の制服、金色に輝く桜章の付いた制帽、両足には巻脚絆で身を固め、日満両国の国旗を先頭に、その後には中隊長、そして三十人ほどの音楽隊が続いた。私たちは銃の代わりに真新しい白木の銃の柄を肩にして足並みを揃え、大地を踏み胸を張り、若き開拓の豆戦士として堂々と行進した。義勇軍の歌を高らかに歌い、士氣旺盛で勇ましい限りであつた。

式典、分列行進が終わつて、富山県の者は家族との面会が許され、近い人は家に帰り、内地最後の夜を過ごした。

翌朝、全員は出航港である伏木に向かった。伏木では公会堂で地元の人達による歓送会があって、赤飯の昼食をいただいた。全ての行事が終わって、伏木港の岸壁に横付けされている貨物船の「射水丸」(約三千トン)に乗船した。

家族、友人などの大勢の見送りを受けた。岸壁は見送りの人で埋まっていて、五色の投げテープをお互いに持って別れを惜しんだ。出航の合図のドラと汽笛の音と共に船は静かに岸壁を離れたが、だんだんと見送りの人々の姿が小さくなっていった。泣き叫ぶ母親の声と、「頑張れよ!」「体気をつけてな」などどなっている友達の声が入り交じって聞こえていたが、それも次第に遠ざかってしまった。いよいよ新天地に向かつて前進するのみである。

#### 四、大陸の土を踏む

生まれて初めての船旅で、皆は甲板に出て遠く離れて行く本土を眺めていたが、やがて見えなくなり水平線が丸みを帯びてきて、地球は丸いということを初めて実感した。夜になると波が高くなって船は横に揺れ

だし、一時間ぐらいつると今度は縦に揺れ始めた。あちこちで真っ青になった豆戦士が吐き始めた。船に慣れている船員まで酔いするほどの荒れようだった。私は幸いにも酔わずにいた。朝食の時間が来ても、食事をする者はわずかに三十人程だった。食べる人が少ないので船員が「朝食は、最高の物を食べさせる」と言って、食事をする者を誘っていた。ピフテキを始めとして、初めて食べるような料理が出されたが、私はおいしくご馳走になった。

四周海ばかりの時化の二日間の航海が過ぎて、三日目に朝鮮半島が見えてきた。こうなると現金なもので、皆元気が出てきた。船は、朝鮮半島の北端の清津に寄港し、燃料、食糧を補給して羅津ロジンに向かった。翌日、羅津に入港しそこで上陸して、大陸への第一歩を踏み出した。羅津で一泊し、翌日大陸縦断列車に乗って、一路北上した。

車窓から見る大陸は、広大でなんとも殺風景だった。日本の列車よりも軌道幅が広く、座席は三人掛けであった。牡丹江ポダンキョウを渡りハルビンに近づいた時に列車

事故があり、乗客は全員降ろされて線路沿いに歩き、ハルビン駅に着いた。駅前の広場には、馬に乗った伊藤博文公の銅像と肉弾三勇士の銅像があったのが印象的であった。

ハルビンを出発して北安省に入ったが、一望千里、広漠たる大草原が続く中、野鹿の群れと鳥の大群に驚かされた。沿線には名も知らない美しい花が、何十キロメートルも咲き続いていて、日本では見られない景色だった。時々、原住民の部落があったが、よく見ると土で造った塀に草で葺いた屋根の低い家屋であった。ハルビンから約八時間余りで終着駅の海倫カレイに到着したが、この名も知られていない小さな駅で下車し、北満の第一歩を踏み出した。

北満の九月の朝はもう肌寒く、うっすらと一面に霜が降りていて、大草原の向こうに今、まさに太陽が昇るところで、その美しさはまるで絵に描いたようである。北満に来たということをしみじみと味わった。「カラン、カラン」と鐘が鳴ったので何事かと見ると、今乗ってきた列車がハルビンに向かって出発する合図

だった。大陸らしく、いかにものどかな風景だった。

#### 五、対店訓練所での生活

対店訓練所は、大隊本部を中心にして北と南に分けられていた。昭和十三年に最初の一箇中隊が入所し、その翌年に一箇中隊、そして昭和十五年には二箇中隊が入所したので、全部で四箇中隊となったが、それでも宿舎は空き家があつて何となく寂しい感じだった。竹で編んだアンペラには驚いた。素足で歩くと足の裏が切れるのではないかとびっくりした。夜は電気がなくランプ生活だったが、これがランプとのつき合いの始まりだった。昭和二十四年にソ連から引き揚げるまで、軍隊時代を除いた期間、ランプと共に生活することになるとは思いもよらなかった。

訓練所生活で必要とする水は井戸からの汲み上げで、見た目にはきれいな水だが鉄分を多く含んでいて、洗濯などに使うと白いものに赤く色が着いてしまった。赤痢になるので生水は絶対に飲まないようにと再三に渡って注意されていたが、それでもつい何気なく飲んでしまう人がいて、その冬には三、四人の赤

痢患者が出た。富山にいた頃には水の事など考えたこともなかったので、改めて故郷の水の有り難みを知った。

北滿の冬は南滿の冬より数段厳しく、零下三十五、六度までに気温が下がると呼吸も困難となる。しかし、警備の手を休ませることはできず、夜間一時間交替の不寝番はまだしも、衛兵勤務はそれこそ苦痛だった。動哨は鉄条網の内側を四周警戒しながら歩くのだが、いつ匪賊の襲撃があるかも知れず、緊張と寒さで朝になると体はくたくたに疲れていた。満州の匪賊は多くの場合抗日グループで、その構成員は、日本の開拓政策によって先祖伝来の土地を強制的に買い上げられて追い払われた失地農民であった。

九月末頃からの乾季になると、大草原では野火が発生するが、いったん野火が起きると二カ月も燃え続けるので手が付けられない。大きな川でもない限りは消す事もできないので、野火の通った跡は黒焦げの大平原となってしまう。

真冬の晴れた時の月は、実に大きくてきれいであつ

た。また、北斗七星も頭上できらきらと輝き、手に届くような感じであった。だが恐ろしかったのは狼の遠吠えで、これほど不気味なものはその後あまり経験しなかったが、それこそ身の毛がよだつという言葉どおりである。

冬で一番苦勞したのは水汲み作業で、深さ十五メートルから二十メートルくらいの井戸から汲み上げるのだが、ちょっとでも井戸の縁にこぼすと、たちどころに凍りついてだんだんと井戸穴が狭くなってくるので大変に苦勞する。また、汲み上げた水もすぐに炊事場に運ばないと、凍ってしまったてすぐ役に立たなくなるのだった。

#### 六、関特演に動員される

昭和十六年八月、関東軍の特別大演習が満州全土において実施された。世にいう「関特演」である。この演習に我々義勇軍も大勢動員された。対店訓練所にも動員がかかり、満鉄の支援に数百人が参加した。動員先は新京（長春）と四平街（シヤンガイ）の中間の公主嶺（コウシュレイ）で、任務は公主嶺から四平街までの鉄道線路の警備で、鉄路をゲ

リラの妨害から守ることだった。

当時は既にソ連国境の情勢が悪化していたので、大演習という名目で、日本内地から多数の部隊や戦車などの武器を送り込むためであった。昼間は静かだが、夜間になるとにわかに関が激しくなってきた。歩兵部隊と戦車部隊などが入れ替わり立ち替わりして北滿に向かつて行った。三カ月近くの演習も終わり、十月末には訓練所に戻った。

私は、その頃から体に異常を感じ、対店の病院で診察を受けて入院させられた。病名は、肺浸潤と言われ、びっくりした。対店の病院では十分な治療が出来ないので、ハルビンの中央病院に移って療養することになった。私の入った病室には五人の患者が入っていたが、後に私以外の人たちは死んでしまい、私一人が残った。私は「早くここを出ないと私も死んでしまう」と思い、療養に努めた。幸いに快方に向かったので、院長に頼んで蓋平ガイヘイの増健訓練所に行くこととなった。

蓋平は、大連と奉天（瀋陽）の中間にあって、気候

も穏やかでリンゴ農場もあり、養生するには適地で、健康を害した訓練生百人程が満州各地から来ていて、健康回復に向かつて努力していた。私もそこで療養に努めていたが、徐々に良くなりそのうちに散歩に出ることも許されて、一日がかりで海の見える所に行った。日本海を久しぶりに見ているうちに「こんなことで死んでたまるか！」という勇気が湧いてきた。この機会に旅順リュウシュンにも行って二百三高地の戦跡などを見て回った。昭和十七年十二月の中頃に対店訓練所に復帰した。

大東亜戦争も次第に激しくなり、食糧増産が強く叫ばれ、三年目の種蒔きが始まった。経験の積み重ねで作業も能率が良くなり、作物も良くできるようになった。開拓団への移動が連日の話題となっていた頃に、海倫カイリンの部隊から指導兵が来て各小隊に配属になり、最後の仕上げの教練が厳しく行われるようになった。

この三年間、鉄の兵士として土と戦い、寒さと戦い、そして私は病氣と闘うなど、苦しい事も多かったが楽しい事もたくさんあった。それらの思い出を対店



訓練所に残して、さらに飛躍する時が迫ってきた。三年間という長い歳月がいつの間に過ぎたのかと、今更のようにその早さに驚くばかりだった。全満の訓練所の長である井上政吉所長の名の入った修了証を手にして、対店訓練所を去る日がやってきた。

#### 七、南沖河開拓団に移る

昭和十八年四月、私達の新しい入植地に決まった浜江省五常県南沖河の開拓団に入った。既に二月には第一次の先発隊が入っていて本隊の受け入れ準備をしていたので、何の心配もなく移ることができた。

富山県出身者と群馬県出身者の集団であったので、富山県の誇る神通川の「神」と、群馬県の河川を代表する利根川の「利」を取って「神利開拓団」と命名された。ハルビンと拉法の中間に、五常という人口約一万五千人程の町があるが、そこから馬車でしばらく奥地に入ると沖河である。北満から南満に下がってくる、気分的にも何となく暖かい所に来たように大らかになり、周囲の風景も、すれ違う現地人の様子も、どことなくのんびりしているような感じを受けた。町も

活気に溢れていて、駅前から出ているマーチョ（馬車）の足音も、海倫の町とは違うようだった。

沖河の町は、戸数約百五、六十で中心街に商店がわずかに数件あるといった感じの辺りな所で、六、七年前までは治安が悪くて開拓者の入植もなかなか困難で、大変な苦勞をしていたという話を聞いた。その先輩開拓団は、富山県の東、西の両砺波郡からの家族開拓団で、沖河から二、三里離れた所に入植していた。

私は、その後に一、二度遊びに行ったことがあったが、その開拓団に出入りしている現地人が富山弁まる出しで話しているのを知り、こっけいだったが反面、懐かしさを感じたものだった。しかし、現地人の中には開拓団員に対して良い感じを持っていない者もいて、反抗的な行動をとっており、沖河の町に買い物に行く時は銃を肩に掛けて行くとのこと、また、夜間は三、四人交替で夜警をする有様だった。私たちが街に出る時は、銃を肩からぶら下げて背の低い小さな満州馬に乗り、長く伸びた頭髪をなびかせてさっそうとした気分になっていた。しかし、その後姿は誰が見

ても日本人には見えず、盗賊が歩いているようだ、と皆から笑われたものだった。

神利開拓団は、団本部で一部落、沖河の町に近い所に一部落、そして私たちの東地区に二部落が配置された。一部落は約六十人だった。私たちの部落は、海内君が部落長、桜井君が副部落長となって、部落共同家族体で全て共同作業だった。

五年後には、一人に二十五町歩が与えられて独立することになっていた。神利開拓団の保有総面積は、山や川を含めて富山県の総面積とほぼ同じであった。その中には満人部落が七つか八つあったと思う。四方は、あまり高くないが山々に囲まれていて、満州にいるという感じはなかった。対店では山も川も見えない広い草原だったので大陸にいる感じをはっきりと認識していたが、ここでは日本のどこかにいるような気持ちになっていた。

気候が良くなってくると、馬で遠乗りしたり、水遊びに興じたり、魚釣りをしたりと、穏やかな神利開拓地での生活だった。内地からの便りや、時々まとめて

送ってくる北陸タイムスで、戦局はますますし烈になり、予断を許さない情勢となっていて、国内では食糧不足も深刻になってきたということを知ったが、それに引きかえまだここは平穏で、内地の人々に相済まぬ気持ちだった。

昭和十八年十二月に、「一時帰国を希望する者は申し出るように」という耳よりの話が出た。私も、友人と話し合って帰国を申し出て、友人五人と共に三年半ぶりに故郷に帰った。母は、「大きくなった、大きくなった」と独り言を言っていたが、その時の事を思い出すと今でも目頭が熱くなる。一カ月程家において、親戚、友人などを訪ね歩いていた。学校では現地報告をして、生徒たちに開拓団生活を話した。一カ月はまたたく間に過ぎてしまい、出発する日が来た。母は出発する直前まで、内原に行く時と同じように「行くのはやめなさい」と、何度も言っていたが、父は何も言わなかった。私もちょっと心が揺らいたが、勇気を出して五人の友人と共に満州に戻った。

開拓団に戻るとすぐに、一年繰り上げの徴兵検査が

待っていた。

#### 八、ハルビンで入隊

関東軍の主力の南方戦場への移動による穴埋めに、百五十万人の在滿邦人にも動員召集がかかり、二十万人の開拓団員も根こそぎ動員された。神利開拓団でも二百六十余人のうち二百人ほどの団員が召集されることになり、正常な開拓団としての活動も不可能になってきた。大東亜戦争敗退の波紋が、満州の一寒村にある開拓団にも押し寄せて来るとは、夢にも思っていなかったことであつた。私たちの繰り上げ徴兵検査は、ハルビンの日本人学校で行われた。団から百人くらいが出頭して検査を受けた。戦時下の特例による徴兵検査なので、大部分の者は甲種合格か第一乙種合格であつたが、私も、以前の胸の病気があつたが、第一乙種で合格となつた。その夜、帰りがけに五常の町で、甲種合格の者、乙種合格の者、そして不合格になつた者が、それぞれの理屈をつけて飲み歩いた。

昭和十九年の夏も過ぎると、麦も黄金色になり、入植二年目の取り入れが始まつた。その年は豊作で、特

に初めての餅米も豊作だつた。正月には自分たちで作つた餅米で餅をつくのを楽しみにしていたが、その餅が出征祝いの餅になろうとは思わなかつた。正月前に召集令状が届いたのだ。

取り入れの終わる頃から二人、三人と出征する者が出て来たが、十一月に入ると一日に十人、二十人とまとまつて出征して、一部落六十人いたのが五、六人になり、警備のこともあるので二部落を一部落にまとめることになつた。

十日に一度、出征する者を送る祝宴が開かれたが、酒が回ると、出ていく者も残る者も感情が爆発して、泣き出したり、怒鳴り出したり、歌い出したりで大騒ぎとなつた。内原から苦楽を共にして助け合い励まし合つてきた仲であり、別れは辛い事だつた。

昭和二十年の元旦の朝は、雲一つない晴天で木々には白い氷の花が咲き、それは美しかった。団本部で元旦の式があつたが、集まる団員の数も目に見えて少なく、団長の新年の挨拶もなんとなく力がなく寂しかった。人が少ないという事はこんなにもわびしいもの

か、と痛感した。部落に戻って、自分たちで作った餅を入れた雑煮と酒で正月を祝った。

五常の兵事部から三月十四日入隊という通知を受け、早速団本部に連絡したところ、岡田君、橋本君、私の三人がその日に入隊する事が分かった。入隊十日前に団を出発する事にした。岡田君と私が出ると、東部落で残る者は五人となってしまい、出る者が残る者を励ますようだった。出発の朝本部に行くと、私たちを送ってくれる馬橋が準備してあった。五年間世話になった川原団長や諸先生方から激励され、残り少ない団員に見送られて別れを告げた。五年間の楽しかった事、苦しかった事、悲しかった事、そして辛かった事などが走馬灯のように脳裏を駆け巡った。

馬橋で山河屯サハカトに出て、そこから汽車で五常に行くことにしていたが、足の遅い満馬では思うように進まず、途中で歩いたり乗ったりして山越えをするので、十里の道のりも苦勞したものだ。山河屯に着いたのは夜の九時頃だったが、人も馬も疲れ果てて口もきけなくなっていた。朝鮮人経営の飲食店に入って酒と

食事を注文して乾杯し、そこでごろ寝をすることにした。寝具もなく、アンペラの床に、満人達の間に割り込んで寝た。こんな状態で入営した人もあまりいないだろう、と寝ながら話したものだ。翌朝、馬橋と別れて汽車で五常に行った。午後二時頃に五常会館に到着、父の友人である池田館長に、入営する事を話したら饑別を頂いた。その日はそこで泊まり、翌朝早く出発してハルビンに向かった。

三月十四日、予定どおりハルビンの兵事部の広場に集合した。その時に鳴っていた教会の鐘の音が何となく哀愁を帯びていて、私たちの前途を占うような印象を受けた。それから後、何かあるとその時のハルビンでの鐘の音が頭に浮かんでくるのだった。

初年兵受け取りの将校が来て、入隊先部隊ごとに集合、点呼が始まった。団から一緒に来た三人は、ここで別れ別れになって迎えに来たトラックに乗り、お互いに手を振って別れたが、橋本君とはこれが永遠の別れとなった。

## 九、終戦そして抑留

八月十五日、私はハルビンの部隊で終戦を迎えた。数日後に部隊は、ハルビンの忠霊塔の下で武装解除をされた。その時も、あの教会の鐘が哀愁を帯びた音を出して鳴っていた。その鐘の音がいつまでも耳に残っていた。その夜、部隊は徒歩で阿城アキョウに向かい、そこから無蓋車に乗せられ葦河イガに行き、さらに歩かされて梅林の収容所に入れられた。そこには満州各地から、開拓地の女、子供達も多数収容されていた。九月中頃には、牡丹江に移されたが何をすることもなく、ただ、ソ連兵が運んでくる食事を取りに行くだけの毎日で、食べる事だけを考えて毎日を過ごしていた。

十一月になると作業が始まった。輸送用の有蓋車に寝台代わりの棚を取り付け、ストープを設置してまきを積み込む作業だった。そしてその貨物列車に乗せられて、満ソ国境の綏芬河スイフンガを越えソ連領に入って、なおも走り続けた。誰一人としてシベリアなどに連れて行かれるとは考えていなかった。皆は、ウラジオストク港から日本に帰るものと信じていた。ウオロシロフか

ら南に向かえばウラジオストクで、北に向かえばハバロフスクだが、私たちを乗せた列車は昼間は動かずに、夜だけ走るのだった。そろそろウラジオストクかな、と太陽の出ている方を見ると、太陽は反対に昇っていた。大学の兵隊が、「これはハバロフスクに向かっている」と言い出した。そのうちに指揮官の将校が回って来て、「自分たちは、ウラジオストク港から日本に帰れるものと考えていたが、ハバロフスクでしばらく作業に従事する事になった。港が結氷して使えない。冬だけの使役だから春まで頑張っ下さい」と話したが、私たちの心の内は、何かがぶつんと切れたような感じだった。

昭和二十年十二月初旬、氷と雪に閉ざされた山と森の真ただ中に、半ば壊れかかった丸太造りの大きな建物が三、四棟ある所に入れられたが、ここは帝政ロシア時代に国事犯としてシベリア送りになった人たちを収容した建物だそうで、私たちもそんな立場に置かれているのかと思い、呆然とした。牡丹江を出発する時に満人の冬服を大量に積み込んだが、その時は「い

かに物資が不足しているからといって、満服まで持つて行かなくてもよいものを！」と話していたが、皮肉にもそれを我々が着ることになった。それからは、希望のない、犬か馬のような生活が続いた。そんな生活が長引くと、誰しも色々な事を考えるようになってくるが、中でも真剣に脱走を考えるグループがあった。

脱走計画は、①作業用の斧を確保する。②隙を見て脱走したら少人数に分散して逃げる。③トラックまたは馬を奪って国境を突破し、満州から朝鮮に向かう。④そのために各班に自動車または機械化砲兵出身の車両運転のできる者を加える。など色々打ち合わせされていたが、間宮海峡は結氷するというからニコラエフスクから氷上を横断して樺太・北海道に行くのがよい、とか、樺太でも朝鮮でもどちらも海を渡らなければならぬから船舶工兵出身者も必要だ、などと毎晩のように集まって口角泡を飛ばしていた。

そんな時に大事件が起きた。三人の脱走兵が出たのだった。私は、勇気を出して脱走したからには、無事に日本にたどり着くことを祈っていたが、半月くらい

経った頃に、ソ連軍の将校が通訳を連れて全員を集合させた。「脱走兵三人のうち一人を射殺、二人は捕まえた。だから脱走しても無駄だ。皆が日本に帰れなくなる」といった意味の事を話した。後で部隊長は「三人が捕まったとは思えない。二人を我々の目の前に連れてこないのだから、三人は逃げたのだろう。無事に目的を達する事を祈るのみだ。あれがソ連の手だ」と言った。しかし、この事件があつてから秘密会議もだんだんと下火になり、夜も静かになったが、反面何となく寂しい感じであつた。

#### 十、馬小屋勤務の捕虜生活

シベリアにも春がやって来たのでウラジオストックの氷も解けて、今度は帰れるだろう、と希望を持って毎日を過ごしていたが、四月中旬になって突然に百人ぐらいの移動を示してきた。移動先は、ここから三里ほど奥地に入った「モシカ八〇一分所」だった。そこには知り合いがたくさんいるので、私は希望した。その頃になると色々なうわさも出て、シベリアの捕虜は一年や二年では日本に帰ることはできないだろうと思

い、知り合いがいる方が心強いと思った。モシカはソ連の犯罪人の収容所だった所で、この地方の交通の要衝で、工場や事務所などもあった。アメリカ製の自動車で、満鉄のマーク入りのレールを運搬していた。この沿線には日本人の捕虜が五万人とも十万人とも言われるほどいて、鉄道建設に必要な枕木、住宅用の木材、道路、橋の補修材などに使う材木の伐採に従事していた。

私は、八〇一分所で家の修理作業をさせられていたが、そのうちに指物大工の組に入れられた。ここではソ連の囚人が我々に交じって水桶を作っていた。捕虜仲間です先の器用な人は、一日のノルマが終わると、残業で旅行用のトランクを作って、たばこやパンと交換していた。私はその後、馬籠工場の手が足りないとのことで、そちらに移った。白樺の木をせいろで蒸して軟らかくして型を取り樫を作るのだが、大変に難しい仕事だった。そのうちに、そこに出入りする馬車屋の囚人あがりのじいさんと仲良くなり、身振り手振りで話をするようになった。このじいさんは、他人のた

めに食料品の横流しをして懲役十五年の刑を受けたが、刑期が残り五年となり、民間で仕事ができるようになったそうだ。所長にも信頼されていて、一軒家を与えられ馬小屋の責任者としてのポストを与えられていた。私は義勇軍以来、馬との生活が五年もあったので馬の扱いには自信があり、じいさんに馬小屋の勤務を頼んでいたところ、話がじいさんから隊長に回り、許可を受けて馬小屋勤務となった。その時はとても嬉しかった。馬小屋勤務一年半、色々な思い出があり、私の捕虜生活の中でもこんなに楽しい日を送ったことはなかった。

シベリアの冬も、春が近づくと氷も解けて何となく気持ちも浮き浮きしてくる。二百頭もいる馬に青草を食べさせるために、三人で山に連れていくのだが、毎日の事なので馬の方も分かっているように思っている。入って行く。「明日の朝まで仲良く食べるんだよ」と言いながら我々は帰るのである。翌朝五時頃、昨日放馬した馬を迎えに行き、二百頭を連れて戻るのである。馬小屋に帰るのが大体七時半頃であった。

昭和二十二年六月、百二十人が他の收容所に移るこ  
とになり、私もその一人に入った。移動先は、五里ほ  
ど奥地に入った收容所で、仕事は山から木を切り出す  
仕事であった。関東軍の軍馬だった馬を使って、切り  
倒した材木を引っ張って下ろすのだが、その老馬には  
鞍跡の傷が痛々しく残っていた。本来ならば作業から  
除外されるべき馬だが、ソ連軍側にはそんな慈悲心な  
どはなかった。この馬は二度と日本の土を踏めないだ  
ろうと思うと哀れでならなかった。私は再び馬小屋勤  
務となった。日本馬十頭、満馬百五十頭がいて、作業  
に使う馬が病氣や怪我をするこの馬小屋に連れて来  
て、丈夫な馬と交換するという使役馬の中継所であっ  
た。秋から翌春まで伐採作業が一番忙しくなってい  
るので、他の分所の分を含んで馬の出入りが激しくな  
っていた。春になると、馬はまた放牧して体力回復を図  
るのだった。夏近くなると五カ月ばかり、テルマから  
二里ほど奥地に入った所の分所に移されて草刈り作業  
に従事したが、ここでは作業の合間に小舟を造り、そ  
れで鱒釣りをした。捕虜生活の中の楽しみだった。

捕虜生活四年目頃から、思想運動がだんだんと激し  
くなって来て、「日本新聞」というのが発行された。  
「天皇島に敵前上陸だ」などと扇動的な記事が多く書  
かれていたし、「集団で日本共産党に入党だ」という  
記事もあったが、私たちは「赤い大根も中身は白い」  
と言って無関心だった。

#### 十一、夢にまで見た帰国

鉄パイプを地下三、四メートルの所に埋める作業に  
従事していたが、手で掘る作業なので大変に難儀だっ  
た。そんな時に本部から連絡が来て、「ダモイ！ ダ  
モイ！ 万歳、万歳、七月十日に帰国だ」と伝えてき  
た。その時の嬉しさは口で言い表す事ができないほど  
だった。シベリアでの過酷な生活の中で病氣もせずに  
生きて無事に帰国できる喜びは、例えようもないもの  
であった。昭和二十四年七月十日に帰国列車に乗っ  
た。ナホトカ港の岸壁に横付けされた引揚船の船腹に  
は赤十字のマークと「高砂丸」という船名がくっきり  
と書かれていた。病院船であった。

長い間、人間の扱いでない生活をさせられて苦勞し



た我々抑留者の心を少しでも慰めようという祖国の人々の温かい配慮であろうか、嬉しさが込み上げて来た。タラップが下ろされて、一人ずつ一步一步踏みしめながら登った。長い距離に感じられたが、岸壁と舷側との間にある目に見えない国境を通過した。

もう日本だ！ ソ連ではない。思わず足が震えた。甲板に上がると、純白の服装をした看護婦が、「ご苦労様でした。もう安心して下さい」と言って頭を下げていた。日本の女性は美しいと、この時改めて感じた。

夕食の合図で食堂に行ったら、畳敷きの食堂であった。そこにはお膳の上に、赤飯、鯛の尾頭付き、刺身、そのうえ徳利が一本並んでいた。祖国日本の心尽くしだった。箸を使うのも、日本酒を飲むのも四年ぶりだった。自然に涙がにじんできた。九年前に内原訓練所に出発する時の我が家での食事のことをふと思いつ出した。

数日後の明け方、甲板に出ているたら爆音が響き、飛行機が一機近づいてきた。よく見ると朝日新聞社の飛

行機で、高砂丸の上空を何回も何回も旋回した。我々は歓声を上げて手を振った。飛行機は翼を振りながら低空で近づいて、我々を目掛けて何かを投下した。それは今日の朝刊で、一面に「ソ連抑留の帰還者帰る」との大見出しがあった。その日、高砂丸は舞鶴湾に錨を下ろし、すぐに上陸用の舢が我々を次から次と棧橋に運んでくれた。棧橋は出迎えの人と、のぼりや旗で埋まっていて、「万歳！ 万歳！」という歓声が沸き起こった。感動の一瞬であった。

舞鶴引揚援護局で二日間、消毒や検疫、身上調査などの復員手続きで過ごした。その後、それぞれの帰郷先グループに分かれて、帰郷列車に乗り舞鶴を後にした。兄が迎えに来てくれて、車中、両親の事、家族の事、村の事などで話が尽きず過ぎていった。

それから今日までは、また収容所生活とは違う苦勞を味わうこととなった。シベリア帰りというただ一つの事象だけで職場から締めだされてしまい、働くにも働けない処遇を受けるようになった。

私達は敗戦によって立場が逆転し、終戦までの私

達、否、日本の行った色々な行為に対する償いという立場から、重い責任を引き受けてきたのに、という自負心は極めて無造作に打ち砕かれ、逆にそんな行動や苦勞は、遠回しではあるが、自業自得という様にも言われて、骨身にこたえたものだった。

昭和二十九年、地元の製鉄会社に就職し、以来三十年その仕事一筋に頑張ってきた。これも、若い時に義勇軍で鍛えられたお陰だと感謝している。子供も結婚し、二人の孫にも恵まれ、今は家内と二人で静かに年金生活を送っている。

シベリア帰りと言っても色々な立場の人がいる今はただ懐かしさのみで多くの人々と会っているが、生き延びた古傷を秘めたまま語り合おうとしない人々も多い。色々と考えればさもありなんと思う。

## 戦争に生きた青少年時代

富山県 山田耕作

### 義勇団に応募の動機

私の生まれた東礪波郡平村は、通称五箇山と言う。最近合掌造りが世界遺産といわれて有名になっており、平村も合掌造りの住居が多く観光客の絶え間なくにぎやかである。四周山に囲まれた庄川沿いの山村で、小学生のころは交通の便もすこぶる悪く、最寄り駅までは二十キロメートルもの山道を峠越えしなければならず、冬場の半年間は雪の牢獄と言われる豪雪のへき地であった。夏は農業と養蚕が主な産業で、冬期間は夏場とれた繭の製糸、機織り、和紙作りで生計を立てていた。

私の家は比較的大きな農家で、小学校へ上がると傾斜の強い畑での仕事や桑摘みなどの手伝いをしていった。私たちの地方でも次男三男の多くは東京、大阪、